

「だろう」の意味・用法

—小説における分析

キャアコップチャイスィラッサナン

✦要旨

「だろう」はモダリティ形式の一つとして数多くの研究者によって研究されてきた助動詞である。それらの先行研究では、様々な用法が導入・羅列されているものの、「だろう」の意味・用法については、未だ、統一的な見解には至っていないようである。本研究では、地の文も会話の文もあるという観点から小説を取り上げ、2000年以降に刊行された8作品について、小説の観察を通して、小説における「だろう」の使用実態を明らかにし、「疑問要素」、「対象への疑い」、「相手への問いかけ」の三つの観点によって「だろう」の用法について統一的な考察を試みたい。

✦キーワード

「だろう」、小説、疑問要素、対象への疑い、相手への問いかけ

✦ABSTRACT

“Darou” in modern Japanese has been researched as one of modality by a lot of researchers. However, various theories are described and not united in those researches, this research will specifically study on usages of “darou” in every aspect from 3 viewpoints: “Element of the interrogative”, “The interrogative toward object” and “Asking toward Listener”. This present research particularly studies usages of “darou” appearing in characters’ dialogues as well as narratives in 8 novels published after 2000 A.D.

✦KEY WORDS

Darou, Novel, Element of the interrogative, The interrogative toward object, Asking toward Listener

The Usages of *Darou* Analysis in novels

SIRATSANAN KIATKOBCHAI

1 はじめに

「だろう」^[註1]の主要な用法は「推量」と「確認」であると言われているが、より多角的に研究されている「だろう」も少なくない。奥田(1984,1985)は推量から確認への連続性に三段階、即ち「おしはかりの文」「念おしのたずねる文」「たんなる念おしの文」を認めている。森山他(2000)は、「だろう」は「判断形成過程」を表示するのが基本的な意味であると捉え、「推量」「疑い」「確認用法」があると述べている。大島(2002)および日本語記述文法研究会(2003)では「推量用法」「確認用法」「いわゆる疑念用法」の三つの用法が認められている。

「だろう」については「推量」「確認」を中心に、さらに細かい意味用法が研究されているが、「だろう」の用法を全般的に捉えた研究は多くはなく、またその見解も統一した説明がなされた段階には至っていない。そこで、本研究では、用例を収集・分析した上で、「だろう」の全般的な用法を表1のようにまとめてみたい。

表1 「だろう」の分類

				疑問要素	
				無	有
対象への疑い	有	相手への 問いかけ	無	①推量用法	③疑念用法
			有	②確認用法	④婉曲的質問用法
	無		—	⑤感動用法	

表1の①～⑤に対応する例を以下に挙げる。

- ① 夜更かしの母は多分隣の部屋で本でも読んでいるだろう。
- ② 知らないうちに知らない人が出入りするの、あんただって嫌でしょう。
- ③ 自分の全体重がスライドする浮遊感、何年ぶりだろう。

- ④ ええと、少々お待ちくださいませ、こちらでよろしいでしょうか。
- ⑤ なんて子供っぽい、いいやつらなんだろう。

まず、第一に「か」や「何」などの疑問要素^[註2]が付随するかという観点を導入する。次の観点としてその文が対象への疑いがあるかどうかを区別する。さらに、対象への疑いがある場合は第三の観点、相手への問いかけを想定するという問いかけの性質で区別する。以上の結果、本研究では①推量用法、②確認用法、③疑念用法、④婉曲的質問用法、⑤感動用法の五つの用法に分類する。

2 「だろう」の作品別・用法別使用数と割合の分析

本研究では、2000年以降に刊行された現代の小説における「だろう」がどのような用法で、また、どれくらい使われているかを把握するために、八つの小説を対象として調査・分析した。その結果をまとめると、以下の表2、図1のようになる。

表2 「だろう」の作品・用法別使用数と割合

作品	①推量用法	②確認用法	③疑念用法	④婉曲的 質問用法	⑤感動用法	作品別 合計
蹴りたい背中	28 (38%)	22 (30%)	22 (30%)	0 (0%)	1 (1%)	73
サヨナライツカ	50 (54%)	5 (5%)	32 (34%)	3 (3%)	3 (3%)	93
失踪HOLIDAY	62 (49%)	2 (2%)	52 (41%)	9 (7%)	2 (2%)	127
波の上の魔術師	175 (68%)	29 (11%)	45 (17%)	9 (3%)	0 (0%)	258
虹	67 (61%)	4 (4%)	18 (17%)	13 (12%)	7 (6%)	109
猫道楽	23 (32%)	45 (62%)	1 (1%)	4 (5%)	0 (0%)	73
猛スピードで母は	31 (46%)	11 (16%)	24 (36%)	1 (1%)	0 (0%)	67
ラブ&ポップ ートパーズII	30 (28%)	31 (29%)	34 (32%)	10 (9%)	2 (2%)	107
用法別合計	466 (51%)	149 (16%)	228 (25%)	49 (6%)	15 (2%)	907

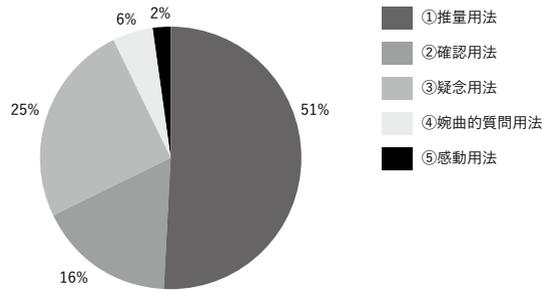


図1 「だらう」の用法別使用数の割合

「だらう」の出現数は全作品で907例ある。作品ごとに少しバラツキはあるが、全体的に見ると使用数と割合を多く占めているのは「推量用法」であり、51%である。次に、「疑念用法」、「確認用法」の順に25%、16%と続いているが、作品によって逆の場合も見られる。最後に、わずかであるが、「婉曲的質問用法」と「感動用法」が6%と2%を占めている。

「だらう」の使用数と用法の関係についての研究としては、田部井（1990）、庵（2009）がある。シナリオの用例をもとに、話しことばにおける「だらう」が推量用法で使われることが少ないことは田部井（1990）に指摘がある。庵（2009）は、現代日本語研究会編の『女性のことば・職場場』『男性のことば・職場場編』の発話データ数を調査し、話しことばにおける「でしよう」の中心用法が「確認」であるとしている。だが、図1に見られるように、小説においては推量用法が一番多く用いられていると言える。さらに、推量用法については、表3からわかるように、会話の文より地の文の方が圧倒的に多く使われている。

表3 各用法における「地の文」・「会話の文」の作品別使用数

作品	①推量用法		②確認用法		③疑念用法		④婉曲的質問用法		⑤感動用法											
	地	会	地	会	地	会	地	会	地	会										
	I	II	I	II	I	II	I	II	I	II										
蹴りたい背中	22	1	3	2	0	0	6	16	18	0	4	0	0	0	0	0	1	0	0	0
サヨナライツカ	30	0	8	12	0	0	4	1	27	1	2	2	0	1	1	1	1	2	0	0
失踪Holiday	59	0	3	1	0	0	1	1	48	0	3	1	0	0	0	9	2	0	0	0
波の上の魔術師	106	0	47	22	0	0	9	20	42	0	2	1	0	0	0	9	0	0	0	0
虹	58	0	6	2	0	0	0	4	18	0	0	0	0	0	3	10	6	0	0	1
猫道楽	19	0	4	0	0	0	40	5	0	0	1	0	0	0	0	4	0	0	0	0
猛スピードで母は	30	0	1	0	0	0	6	5	24	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
ラブ&ポップ ートバズII	24	0	5	1	0	0	13	18	32	0	1	1	0	0	0	10	2	0	0	0

地：地の文 会：会話の文 I：だらう II：でしよう

3 「だらう」の用法

本節では、1節で分類した「だらう」の五つの用法を詳しく見る。

3.1 推量用法

推量用法の「だらう」は従来言われてきたように、話し手の直接的経験領域にない知識について、思考、想像、仮定という不確かな認識によって判断を下す用法である（cf 奥田 1984, 1985; 三宅 1995, 1996; 金水 1992; 宮崎 1995, 2005; 安達 1999; 大島 2002; 日本語記述文法研究会 2003）。

- (1) 夜更かしの母は多分隣の部屋で本でも読んでいるだらう。(猛)
- (2) 東京都荒川区町屋、ここが上品で閑静な住宅街だなんていう東京っ子はいないだらう。(波)

- (3) これが光子との結婚を仲間たちに報告するためのめでたい席でなければ、三十歳を目前にしたこの旺盛な年頃に、会釈だけで終わることはなかっただろう。(サヨナラ)

また、「多分」や「きっと」等の副詞と共起することも多い。さらに、「だろう」の後に「思う」「考える」という動詞が付く場合もよく見られる。場合によっては「な」という終助詞が共起することもある。

- (4) クラスの交友関係を相関図にして書けるのは、きっと私くらいだろう。(蹴りたい)
- (5) きっとあの子が役立つだろうな、とかいつもいつも考えていた。(虹)
- (6) レタスの商売がダメになった人達やO・157で死んだ人の家族以外はみんな忘れるだろうな、と思った。(ラブ)

推量用法の「だろう」は地の文だけではなく、対話にも用いられる。ただし、量的には比較的少ない。その場合、「と思う」のような意味になる。

- (7) 「それで、おれがやるのはどんな仕事なんですか」
「ぼくの使いであちこちの金融機関へ出むいてもらったり、資料を集めてもらったり、まあケースによっていろいろだ。最初の三カ月ほどは 트레이ニーとして研修してもらうことになるだろう」(波)
- (8) おれは応接セットの横に立った。「こちらが辰美総業の辰美周二さん。彼はぼくの秘書で白戸則道くん。いたらないところもあるだろうが、よろしく頼みますよ」(波)

聞き手の存在を考慮する場合、性別や上下関係等による位相差があるため、「だろう」と「でしょう」の使い分けが見られる。

- (9) 「昨日、届けられていた手紙によると、今日の午後、身代金の受け渡しが行われます。まだ詳細はわかっていますが、犯人は何らかの方法

であなたに連絡を送り、指示を与えるでしょう。(後略) (失踪)

- (10) 下界はまだ殆どが当時のままである。「ここらへんはあまり変わっていない」と言うと、新居が、ええ、一般庶民の生活にはあまり大きな変化はありません、と答えた。「生活の格差はまだまだ大きいと言えるでしょう」「車が増えたな。昔はあの小型のオート三輪車、ええと、なんと言ったかな」「トックトックです」(サヨナラ)

さらに、「でしょう」を用いる場合、丁寧な表現となり、相手を尊重するという意味が生じる。従って、話し手が直接に知り得ない聞き手の感覚・感情・判断等の事柄に触れる際、「でしょう」を使うことによって、聞き手に配慮しながら話し手の考えを述べるがよく見られる。

- (11) 「ご存知でしょうが、市場の空気は変わり身が速い。」(波)
- (12) 「(前略) 暗屋で村井さんが目的のものを見つけた時、あなたの後ろには雪村さんが立っていたのです。あなたはその時、家の中に一人きりだと思っていたのでしょうが、本当はもう一人いたわけです。(後略)」(失踪)

また、寺村(1984)が「ダロウは主観性の強い表現」、益岡(1991)が「断定保留」と述べているように推量の機能から控え目な断定の機能への移行が見られる。「だろう」を付することにより、判断や主張が控え目になる傾向がある。

- (13) 「うまい話には裏がある。きみも気をつけたほうがいいだろう。私は尾竹橋通り銀行被害者の会の顧問をやっている。今夜、時間はあるかね。」(波)
- (14) 「最終期限はいつごろとお考えですか」
「政府のやることはさっぱりわかりませんが、十月か遅くとも十一月には法案は可決されるでしょう」(波)

推量用法の「だろう」はいわゆるC類^[註3]の接続助詞の前にもよく現れる。

その接続助詞は「から」「し」等の理由を表す接続助詞であったり、「が」「けど」等の逆接を表す接続助詞であったりする。

- (15) きっとこの手紙はあなたを煩わせるだけでしょうから、迷わず破棄なさることをお勧め致します。(サヨナラ)
- (16) なんとか取支とんとんのところまで持ちこたえたと思っているだらうが、そんな我慢大会は投資じゃない。(波)

推量は基本的に話し手自身の中で行われることが多い。いわゆる地の文に用いられるものであるため、推量用法では「だらう」が用いられるのが基本である。ただし、対話の場合は、「でしょう」という形式が用いられることが多い。なお、「でしょう」は庵(2009)でも述べているが、天気予報などでも使われるように、〈上〉から〈下〉、つまり、情報の所有者から非所有者にむかって発せられるケースが多い。

3.2 確認用法

確認用法の「だらう」は様々な観点や立場によって研究されている。「だらう」「じゃないか」「よね」の三つないし二つの形式を関連させた考察が、森山(1992)、蓮沼(1995)、安達(1999)である。談話のレベルで「だらう」を分析したのは、金水(1992)、銅直(2003)である。推量と確認の関係を論じているのは奥田(1984,1985)、三宅(1995,1996)、安達(1999)である。三枝(2003)では、確認用法の「だらう」は助動詞ではなく、終助詞であると考え、「確かめ」「押し付け」「気付かせ」の三つに下位分類している。本稿では、「だらう」を終助詞ととられることに関してはもう少し検討が必要だと考えるが、三分類については、ほぼ三枝(2003)に従う。ただし、三枝(2003)とは異なり、聞き手・話し手における情報量という観点を用い、発話以前の時点での情報量により「聞き手への確かめ」、「聞き手に対する気付かせ」、「話し手の押し付け」の三用法に分ける。さらに、イントネーションについて見てみると、「聞き手への確かめ」と「聞き手に対する気付かせ」の場合は上昇調が用いられるのに対し、「話し手の押し付け」の場合は下降調が用いられる傾向がある。表4により、話し手と聞き手における情報量についておよその傾向を見てみよう。

手と聞き手における情報量についておよその傾向を見てみよう。

表4 話し手・聞き手における情報量

用法	情報量	
	聞き手	話し手
聞き手への確かめ	○	△
聞き手に対する気付かせ	○	○
話し手の押し付け	△	○

○：情報を持っている。
△：情報を持っていない。
または、相手より少ない。

「聞き手への確かめ」の用法は、聞き手のみ情報を持っている場合、または、聞き手の情報量が多いため、話し手にとって不確実なことを聞き手によって確実にしてもらうために、確認を要求したり、話し手が推量した内容を聞き手に問いかけたりする場合である。

- (17) 「三十分ない？まだ電車はあるでしょう、三十分ぐらいずれるだけだから」(ラブ)

当然のことながら、聞き手の感覚・感情・判断は話し手が直接知り得ない事柄である。その場合は、聞き手からの承認を引き出すために、「だらう」が用いられる現象も多く見られる。

- (18) 「知らないうちに知らない人が出入りするの、あんただって嫌でしょう」(蹴りたい)
- (19) 「さっき電話で週末はいそがしいだらうといっていたでしょう？」
「ええ、保坂さんは大人の女性というか、魅力的だから。たぶん素敵なお相手がいるんだらうと思って」(波)

次に、「聞き手に対する気付かせ」について考察する。「聞き手に対する気付かせ」の場合、話し手も聞き手も双方が情報を所有している。話し手と聞き手

の共有体験や知識として本来なら持っているはずの情報に気付かない聞き手に対して、その情報に気付かせるものである。

- (20) 「青山だからここからすぐ、青山の黄色い地下鉄あるでしょ?あそこ
の近く、すごくきれいな事務所だから、(後略)」 (ラブ)
- (21) 「ほら。芹田のところの近所にプラモデルの専門店があるだろう、遅
くまでやっている」 (猛)

最後の「話し手の押し付け」については、「話し手のみ情報を持っているか、または、話し手の情報量の方が多い。話し手の持っている情報について聞き手にその情報を押し付けたり、同意をしてもらったりするために問いかけるものである。

- (22) 「別にいいよ、めんどくさいし。静かに廊下歩いて、そのままおれの
部屋行けばいい。」「ちょっとー、いいわけないでしょ。」 (蹴りたい)
- (23) 「うんじゃない。『はい』だろう」祖父は言葉遣いや間違いにとてもう
るさい。 (猛)

形式については、確認用法では「う」が省略され、「でしょ」「だろ」となる現象がよく見られる。

- (24) あ、プリって猫の名前ね、プリマベラっていうの、すてきでしょ?」
(ラブ)
- (25) 「洗濯物は着たい時になったら直接もぐことにしている。わざわざた
たんだりしないんだ。合理的だろ」 (蹴りたい)

「だろう」の確認用法は当然ながら聞き手に確認する用法である。確認というのは聞き手に働きかけることであり、言うまでもなく聞き手の存在を考慮した上で用いる用法である。独話ではなく対話のため、確認用法では基本的に「でしょう」が用いられる。ただし、聞き手・話し手の性別や上下等の位相差

によって「だろう」が用いられることもある。即ち、確認用法の場合は、主に「でしょう」が用いられるが、状況により——例えば、話し手が男性で、聞き手が目下の人の場合——「だろう」が用いられる。

3.3 疑念用法

疑念用法の「だろう」には、形式上では、上述した用法と異なって「か」や「何」等の疑問要素が付随する。従来の研究において、「疑念」を「だろう」の一つの用法として論じたのは、大島(2002)である。そして、「だろうか」について研究を行ったのは宮崎(1995,2005)、鄭(2004)である。また、中嶋(1997)では「だろう」の「詠嘆」と「反語」の用法について述べられている。本稿では、先行研究を踏まえて疑念用法を「自問」「断定回避」「反語」の三つの用法に分ける。

まず、「自問」は、その命題の真偽や欠けている情報について話し手がまったく見当がつかない状態にいることを表す用法である。

- (26) 自分の全体重がスライドする浮遊感、何年ぶりだろう。 (失踪)
- (27) あの傘に見覚えがあったものですから……つい、どんな人の持ちもの
だろうと思ったんです。 (猫)

次に、「断定回避」は、単なる主観的な判断に近い用法であるが、「だろうか」を利用しながら断定を回避する。

- (28) そのオヤジはまだタカノの店の前にいた。年は四十代の後半だろう
か、イタリア風のダブルのスーツの下にオレンジ色のポロシャツを着
て、ポロシャツには外国のゴルフクラブのロゴがワンポイントで入っ
ていた。 (ラブ)
- (29) 隣には娘だろうか、五十がらみの蛍光ピンクのトレーナーを着た太っ
た女が座っている。パーマの髪は明るい栗色だった。 (波)

ただし、断定回避の機能として用いられる場合は、「ではないか」「のではな

いか」と共起する傾向が見られる。これらは文末において聞き手、読み手に疑念を提起するものである。

- (30) こうやって陽の当たる所で見ると、なかなかいい勝負、むしろ勝っているじゃないだろうか。(蹴りたい)
- (31) そろそろ私たちはつぎの段階にすすむ必要があるのではないだろうか。(波)

最後に「反語」の用法についてみる。疑問表現の形式を有しながら肯定あるいは否定の事態を逆に置き換えるような表現手段を用いる。文の内容とは反対の事態を相手に強く主張する用法である。

- (32) しかし、彼女を受取人に指名した手紙が、本人の手で運ばれてくることに、警察は不審なものを感じないだろうか。(失踪)
- (33) そしてご主人様は私がかばおうとして、わけのわからない嘘をつかなくてはならないだろう……そんなにしてまで、職場に関してわがままを言っているものだろうか?と私は少しきがひけ始めた。(虹)

疑念用法は基本的に自分に疑いを問いかける用法のため、「だろう」が多く用いられるが、「でしょう」が用いられる場合も見られる。その場合、一見(相手に応答を求める)質問に見えるが、実は疑いという本来の性質は変わらない。相手の存在を考慮するため、「でしょう」を使うに過ぎない。(34)はその例である。(35)は「ではない」「ではないか」と共起し、疑問文の形式を用いながら、質問に対する答えとして「でしょう」を用いている。

- (34) わたしは世田谷区に住んでいる者で、結婚済みの三十四歳、横文字の仕事をしており、文化人や有名人の友人もいます、性格は明るく、遊びの大好きなあなたのスペアにもってこいの人間です、身長は百七十、体重は七十五、学生時代からスポーツしてましたんで、どちらかというとガッチリボディでしょう、先週グアムから帰ったばかり

で、ちょうど黒く焼けてですね、(後略) (ラブ)

- (35) 「町屋駅前支店一階の受付ロビーの広さはきみも知っているな。あそこならどのくらいの人数を押しこめると思うかね」カウンターの長さは十メートルほどで、ロビーには三人掛けのソファが八脚奥をむいて並んでいた。はいつて右手にはキャッシュディスペンサーのコーナーが仕切られ、四台の機械が据えつけられていたはずだ。おれは店内配置を思い浮かべながらいった。「ざっと六、七十人くらいのもんじゃないでしょうか」(波)

3.4 婉曲的質問用法

婉曲的質問用法は、従来疑念用法の一部として扱われてきたが (cf. 大島 2002; 鄭 2004; 宮崎 1995, 2005; 三枝 2003; 日本語記述文法研究会 2003)、本稿における重要な観点である「問いかける性質」と、控え目な態度であるという特徴を持っており、丁寧な疑問としても用いられる。一方、疑念用法には「相手への問いかけ」がない。さらに、表2の「だろう」の作品・用法別使用数と割合からわかるように、「婉曲的質問用法」の使用数はわずかであるが、使用されている。そのため、「婉曲的質問用法」を「疑念用法」と区別し、「だろう」の第四の用法として立てることとする。形式上では (34)(35) は (36)~(41) と同様に「でしょうか」が用いられるが、性質上は異なる。(34)(35) はあくまでも疑いを投げかけるだけであるのに対して、(36)~(41) では、応答を要求するため、相手に質問する用法である。(37) は許可を求め、(37)(38) は依頼するものであり、(39)(40) は情報を要求するものである。(36)~(40) のような質問文は、「でしょうか」を「ですか/ますか」と置き換えても意味が変わらないが、「でしょうか」の方が丁寧である。また、(41) のように、相手に確実な情報がない場合、「でしょうか」を用いることによって、相手に強制的に答えを求めるのではなく、相手の考えを求めるということとなる。つまり、正確な答えへの強制を緩和することになる。こうした点から言えば、「婉曲的質問用法」とは「質問文の待遇表現である」と言える。

- (36) 「ええと、少々お待ちくださいませ、こちらでよろしいでしょうか」(ラブ)

- (37) 「店に戻らせてはもらえないでしょうか。」 (虹)
- (38) まことに申し訳ありませんが電源をお切りになっていただけませんか
でしょうか。 (ラブ)
- (39) 「はい、なんのご用でしょうか」「おはようございます。辰美と申します。今日は小塚さんとお約束しているのですが」よく響く渋い声だった。 (波)
- (40) 「……猫を買いに来たわけじゃないんです。駒形さんにお目にかかりたいのですが、ご在宅でしょうか。」 一朗は口の達者なその男を、これが依頼人かと訝りながら眺めた。学生には見ないが、会社員でもなさそうだった。「どっちの、」訊き返されて、一朗は求人票の写しを確認した。 (猫)
- (41) 「ナオさんを誘拐した後、犯人が一度、家族を安心させるような手紙を書かせたのはなぜでしょうか。」
「これは、犯人が準備を行う期間だったと、我々は考えています。(後略)」 (失踪)

ただし、「でしょうか」は用いることができない場合もある。例えば、(42)bのように、「勧誘」のような相手への働きかけの質問文では、「でしょうか」は用いられない。聞き手の利益となる行為を勧める場合には、相手に断りやすくしてしまう点で不自然になる。(cf. 森山他 2000)

- (42) a 食べませんか。
#b 食べないでしょうか。 (作例)

婉曲的質問用法は、基本的に聞き手の存在を考慮するため、「でしょう」が多く用いられるが、性別や上下関係等による位相差がある場合、「だろう」が用いられることも見られる。

- (43) じゃあ、その駅の、駅前にあるオープンカフェみたいところでだろう? 今から戻って、支度して、九時には行けます。あそこは遅

くまでやっているのを見たことがあるので大丈夫です。雨が降りそ
うなので、テラスの、屋根があるところの庸にいてください。」 (虹)

3.5 感動用法

感動文については、山田 (1936) などにより、古くから、現代語で言う「きれいな花!」のような文を中心に研究がなされてきた。『言語学大事典』(1996: 247) では、あらゆる発話には、多かれ少なかれ、ある種の感嘆なり感動が含まれているが、強い感嘆や感動が表出された文を、一般に「広義の感嘆文」(感嘆表現、感動表現) とすると定義されている。

さらに、(44) のような感嘆文特有の言語形式や統語特徴を備えた文は、「狭義の感嘆文」と定義されている。

- (44) 「何という (何て) 人なんだろう!」

「なんと〜だろう」による文を、本研究と同じ立場でいわゆる感動文として認める研究には、大鹿 (1989)、安達 (2002)、笹井 (2006) などがある。

ただし、「なんと〜だろう」による文をいわゆる疑問表現とした研究も見受けられる。尾上 (1986) は、話し手の情意を表現していることは指摘しているが、文の種類としては疑問文、または疑問周辺にあるものとしている。山口 (1990) では、「なんと」形式は「詠嘆性の表現」とされ、高い情意性を持つ疑問表現の一つとしてみなされている。

本研究では、「{なんと／なんて} + 述語^[#4] + {こと／の} + {だろう (か) /か／だ}」のような文を感動用法の一つとし、「感動感嘆」と呼ぶことにする。「感動感嘆」は発見的な認識による感情的経験を表現するものである。即ち、対象の行動や状態があまりにも予想外のもので言い表しようがないことや、主体に情意をもたらした対象にあまりにも感激し、言語ではとても表現しがたいことを、「なんと〜だろう」を修辭的に用いて表現するものと考えられる。

- (45) なんて透明な黄色だろう、本当に輝くようなレモン色だった。 (虹)
- (46) 「高田くんの下で働いているなんて、なんて奇遇でしょう!」とにかく

あの子はいい子よ、本当にタヒチが好きで好きでね。」 (虹)

感動用法には (45)(46) のような文の他に、(47)(48) のような文もある。このような文を「感動詠嘆」と呼ぶ。「感動詠嘆」は、「どんなに」「どれほど」などの不定の意味を持つ程度の成分に後続し、喜び・賞賛・後悔等の強い感動を表すものである。

(47) いつかこの金山さんと、私と、ご主人様がいっしょにこの島に来ることができたらどんなにいいだろうと。そうしたら、涙が一粒こぼれてしまった。 (虹)

(48) 誰か一人に決めることが自分の長い人生にとってどれほど重要なことなのだろう、とも思った。 (サヨナラ)

笹井 (2006) では、(45)(46) のような「なんと」型文は疑問表現や推量表現などの叙述文から質的な変化を起し、感動文として機能していると述べ、(48)(49) のような文は、未だ疑問文でありながら程度の甚だしさに対する話し手の情意を表現している文と指摘しているが、(47)(48) のような文は本研究では、「感動詠嘆」とし、程度の甚だしさに対する話し手の情意を表現している面では、感動文 (ここで言う「感動感嘆」と同様であるとみなす。即ち、「感動詠嘆」は「感動感嘆」と同様に対象への疑いはなく、喜び・賞賛・後悔等の強い感動を表す用法である。ただし、本研究は安達 (2002) を踏まえて (47)(48) のような例を (45)(46) と区別したい。

安達 (2002) にも確認されているように、形式面の特徴として「感嘆文」(ここで言う「感動感嘆」) は文末の名詞形式が必須であるが、「詠嘆文」(ここで言う「感動詠嘆」) は必須ではない。さらに、発話時に限定されるか否かについて、「感嘆文」はあくまで発話現場における感嘆の気持ちの表出であったのに対して、「詠嘆文」はある仮定的な条件のもとでの詠嘆の気持ちを表す例が多いとの指摘があるように、「感動詠嘆」は眼前の対象にも、仮定の対象にも、情意を表すことができる一方で、「感動感嘆」は仮定の対象に対して情意を表すことができない。最後に、「だろう」が省略できるか否かに違いがある。

「感動感嘆」は (45')(46') のように「だろう」を用いずに感嘆を表すこともできるのに対して、「感動詠嘆」は (47')(48') のように「だろう」を省略する場合、「か」のような疑問詞を付随することが必須である。

(45') なんて透明な黄色だ、本当に輝くようなレモン色だった。

(46') 「高田くんの下で働いているなんて、なんて奇遇なこと!とにかくあの子はいい子よ、本当にタヒチが好きで好きでね。」

(47') いつかこの金山さんと、私と、ご主人様がいっしょにこの島に来ることができたらどんなにいいかと。そうしたら、涙が一粒こぼれてしまった。

(48') 誰か一人に決めることが自分の長い人生にとってどれほど重要なことなのか、とも思った。

感動用法は対象への疑いはないが、「だろう」を使う以上、不確実性が含まれる。それは情意をもたらした対象の程度が甚だしく正確に言い表せないことであると考えられる。なお、感動用法については、以上述べてきた四つの用法とは性質上の大きな懸隔があり、感動文自体の研究を深めながらさらに検討する必要がある。

4 まごめ

本研究は、小説の用例の観察を通して、「だろう」を①推量用法、②確認用法、③疑念用法、④婉曲的質問用法、⑤感動用法の五つの用法に分類した。分類に際しては、以下の三つの観点の有無に着目した。

1. 対象への疑い
2. 相手への問いかけ
3. 「か」や「何」などの疑問要素

ただし、それぞれの用法には共通した性質があり、それは「不確実性」であ

ると考えられる。まず、確実でないことについて仮説を立てるのが、「推量用法」である。次に、その仮説を明らかにするために、確認をとるか、または、聞き手に認識してもらおうのが「確認用法」である。しかし、その仮説を相手に確認せず、疑問として抱いて自分に問いかける場合は、「疑念用法」となる。一方、その仮説に「か」という疑問詞を付し、聞き手に控え目な態度で聞くのなら、「婉曲的質問用法」となる。最後に、「感動用法」は対象への疑いはないが、情意をもたらした対象の程度が甚だしく、正確に言い表すことができないため、不確実性があると言える。

さらに、話しことばとは結果が異なるが、小説における「だろろう」の中心用法は「推量用法」であることがわかった。

〈学習院大学大学院生〉

注

- [注1] …… 本稿では「だろろう」と「でしよ(う)」(いずれも本文中で例文の中に出てくる)を等価とみなす。中北(2000)は、談話におけるダロウ・デショウについて確認要求の場合、必ずしも形態と実質的な待遇価値が一致しないと述べている。筆者も同じ立場であるが、本稿では区別しない。また、「のだろろう」を対象としない。
- [注2] …… 問要素は「か」や「何」などのような疑問詞のみとし、上昇調や下降調などのようなイントネーションと区別する。
- [注3] …… 南(1993)を参照。
- [注4] …… ここで言う述語とは形容詞述語、形容動詞述語、名詞述語をさす。ただし、名詞述語の場合は、その名詞を修飾する形容詞・形容動詞が必要である。

参考文献

- 安達太郎(1999)『日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版
- 安達太郎(2002)「現代日本語の感嘆文をめぐって」『県立広島女子大学国際文化学部紀要』10, pp.107-121.
- 庵功雄(2009)「推量の「でしよう」に関する一考察—日本語教育文法の視点から」『日本語教育』7, pp.58-68.
- 大鹿薫久(1989)「感動文の構造(承前) 一句と文についての把握」『ことばとことのは第六集』pp.96-101. 和泉書院
- 大島資生(2002)「現代日本語における「だろろう」について」『東京大学 留学生センター

紀要』12, pp.21-40.

奥田靖雄(1984)「おしはかり(一)」『日本語学』3(2), pp.54-69.

奥田靖雄(1985)「おしはかり(二)」『日本語学』4(2), pp.48-62.

尾上圭介(1986)「感嘆文と希求・命令文—喚体・述体概念の有効性」『松村明教授古希記念国語研究論集』pp.555-582. 明治書院

亀井孝・千野栄一・河野六郎(編)(1996)『言語学大事典 第6巻 術語編』三省堂

金水敏(1992)「談話管理理論からみた「だろろう」」『神戸大学文学部紀要』19, pp.41-59.

三枝令子(2003)「「だろろう」の意味と働き—助動詞から終助詞まで」『一橋大学留学生センター紀要』6, pp.63-76.

笹井香(2006)「現代語の感動文の構造—「なんと」型感動文の構造をめぐって」『日本語の研究』2(1), pp.16-31.

鄭相哲(2004)『日本語認識モダリティの機能的研究—ダロウを中心に』J&C出版(韓国)

田部井圭子(1990)「談話における「だろろう」構文」『亜細亜大学教養部紀要』41, pp.103-118.

寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版

銅直信子(2003)「「だろろう」の意味と働き—助動詞から終助詞まで」『一橋大学留学生センター紀要』6, pp.63-76.

中北美千子(2000)「話におけるダロウ・デショウの選択基準」『日本語教育』107, pp.26-35.

中島孝幸(1997)「日本語の推量表現について—ダロウとマイ」『甲南大学紀要』文学編107, pp.27-41.

日本語記述文法研究会(編)(2003)『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』くろしお出版

蓮沼昭子(1995)「対話における確認行為「だろろう」「じゃないか」「よね」の確認用法」

仁田義雄(編)『複文の研究(下)』pp.389-419. くろしお出版

益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版

南不二男(1993)『現代日本語文法の輪郭』大修館書店

三宅知宏(1995)「「推量」について」『国語学』183, pp.86-76.

三宅知宏(1996)「日本語の確認要求的表現の諸相」『日本語教育』89, pp.111-122.

宮崎和人(1995)「「～ダロウ」をめぐって」『広島修大論集 人文編』35(2), pp.135-146.

宮崎和人(2005)『現代日本語の疑問表現—疑いと確認要求』ひつじ書房

森山卓郎(1992)「日本語における「推量」をめぐって」『言語研究』101, pp.64-81.

森山卓郎・仁田義雄・工藤浩(2000)『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店

山口堯二(1990)『日本語疑問表現通史』明治書院

山田孝雄(1936)『日本文法学概論』宝文館出版

用例出典

蹴りたい：綿矢りさ『蹴りたい背中』河出書房新社 2003

サヨナラ：辻仁成『サヨナライツカ』世界文化社 2001

失踪：乙一『失踪HOLIDAY』角川文庫 2003

波：石田衣良『波の上の魔術師』文芸春秋 2001

虹：吉本ばなな『虹』幻冬社 2002

猫：長野まゆみ『猫道楽』河出書房新社 2002
猛：長嶋有『猛スピードで母は』文藝春秋 2002
ラブ：村上龍『ラブ&ポップートパーズII』幻冬社文庫 1997
